



新刊案内

just published

『蘇える鬼平犯科帳』

「鬼平」誕生から50年。逢坂剛、諸田玲子、土橋章宏、上田秀人、門井慶喜、風野真知雄、梶よう子が、新たに「鬼平」に命を吹き込んだ短編集。池波正太郎が自ら選んだ傑作短編も収録。



池波正太郎ほか／著
(文藝春秋)

『アナログ』

全てがデジタル化する世界で悟とみゆきが交わした、たったひとつの不器用な約束。素性も連絡先も知らないまま、なぜか強烈に惹かれあう2人の「アナログ」な関係が始まり…。誰かを大切にすることは何かを問いかける恋愛小説。



北野 武／著
(新潮社)

『若冲と京の美術』

大阪の実業家、細見良にはじまる細見家三代の蒐集をもとに京都に開館した細見美術館。そのコレクションから、奇想の画家、伊藤若冲の作品群を中心に、「京」をテーマとして各分野を代表する名品を紹介。



細見美術館／監修
(紫紅社)

『ねこのピートだいすきなおやすみほん』

みんなが、ピートのうちに泊まることになりました。たくさん遊んで、ようやく眠ることにしますが、なかなか寝付けません。そこでピートは、みんなに絵本を読み始め…。おやすみ絵本。



私バリー・ティン／作
(ひさかたチャイルド)

お知らせ

library information

年末年始の休館のお知らせ

12月28日(金)から1月4日(木)まで年末年始のため休館します。返却は玄関横返却ポストにお願いします。

おはなしアップルのクリスマスおはなし会

- とき 12月16日(土) 午後2時から
- ところ 阿蘇図書館研修室



移動図書館

bookmobile

●阿蘇・一の宮地区 (1月12日(金))

西役犬原公民館	9:40 ~ 10:00
▼	
竹原公民館	10:05 ~ 10:25
▼	
坊中公民館前	10:35 ~ 10:55
▼	
佐伯商会前	11:00 ~ 11:10
▼	
赤水駅前	11:30 ~ 11:50
▼	
宮本酒店前	11:55 ~ 12:15
▼	
坂梨公民館	15:00 ~ 15:20
▼	
古城公民館	15:30 ~ 15:50

●波野地区 (12月12日(火)・1月16日(火))

波野保健福祉センター 11:40 ~ 12:00

※天候や道路状況により巡回を中止することもありますのでご了承ください。

塗装・防水工事・メンテナンス



株式会社 井上

〒869-2302

熊本県阿蘇市三久保448番地22

web <http://www.aso-inoue.com/>

E-mail info@aso-inoue.com



塗装内容

(屋根・壁・破風板・軒天・デッキ・塀・他)

防水内容

(雨漏れ調査・屋上・ベランダ・コーキング・他)

-お見積・調査 無料-

もしも 0967-32-1501

広告

第13回

阿蘇市読書感想文コンクール 入賞者紹介

11月11日、子ども芸術祭にて第13回阿蘇市読書感想文コンクールの表彰式が行われました。
今年は今応募73点の中から厳選な審査の結果、16点が選ばれました。

阿蘇市長賞

一の宮小学校 4年 長尾 優輝さん
一の宮中学校 1年 大塚 興さん
阿蘇中央高校 1年 渡辺 滴さん

図書館長賞

内牧小学校 6年 増山 拓人さん
波野中学校 3年 市原 愛音さん
阿蘇中央高校 2年 野尻 奈々美さん

阿蘇市教育長賞

阿蘇西小学校 1年 イリグ 英さん
内牧小学校 2年 浅久野 ひなたさん
内牧小学校 3年 桑本 理央さん
波野小学校 4年 三宅 来実さん
阿蘇小学校 5年 村尾 凛さん
阿蘇小学校 6年 甲斐 真優さん
波野中学校 1年 阿南 春奏さん
波野中学校 2年 児玉 暖さん
阿蘇中学校 3年 永田 志織さん
阿蘇中央高校 1年 笹原 理瑚さん



市長賞表彰の様子
渡辺さん（左）と長尾さん（右）

市長賞 作品紹介

「干したから」を読んで
一の宮小四年 長尾 ゆうき

「干したから」って何のことだろう。何を干したのかが知りたくなったのでこの本を読んできました。この本は、いろいろな物を干して長持ちさせる工夫が書いてあります。たとえば、肉、魚、野菜、米類などのぼくの生活の中でよく食べているものもあり、干した物とは思わず食べていました。この本にのっている干す物にも意外なものがありました。カエルやコウモリやネズミにはびっくりしました。ミヤンマーには、せんべいのような豆まであります。外国にも干す知恵があるんだと思いました。でも読んでいくうちに、どうして干すんだらうと不思議になりました。「干す」ということは、物の水分がぬけてなくなり、物が軽くなって、たくさん持てるようになり、水分がいっぱいある食べ物、そのままにしていると、カビなどの小さ

な生き物がくっつきすぎてしまいます。そこで、干してくさりにくくするのだそうです。「干す」ということを昔の人はよく考えたと思います。ぼくだったら思いつきません。心の中のこの文は、「私の身のまわりにある干したものの。それは、自然にある恵みと人の工夫の結しよう。野菜や魚肉となる動物。太陽の光。そして人の手。知恵。そうした物を私たちは食べている。」という所です。ぼくは、文がすばらしいと思いました。干した物は昔の人の生活の知恵でできていたことを、はじめて知りました。ぼくの家の台所にも、いりこやこんぶ、かつおぶしなど、干した物がたくさんあり、それを食べてくらししていることにも気がつきました。干しかげんにも、いろいろ工夫がありました。ずっと干しているところからかわいて、使う時はいったん水にもどしてから使わないといけません。けれど長持ちします。少し水分がある物は、水にもどさなくていいです。それで昔の人は早く食べるのは少し干し、後で食べるのは長く干しているのが分かりました。たくさん干すの工夫があるのだと思いました。

ぼくは、これからも昔の人の知恵から生まれた「干した物」のよさを見つけていきたいと思っています。



『干したから...』
森枝卓士 著
(フレール館)

(審査公表)

なぜ「干す」のかという疑問が解明されていく様子や、「干す」という行為が様々な工夫や知恵の上で成り立っていることを知っていく過程が作品を通してよく伝わってきました。また、本を読んで知ったこと、自分の考えや気づきをうまくリンクさせながら展開している点も感想文として高く評価できます。全体の構成や表現も優れていて完成度の高い作文であり、阿蘇市長賞にふさわしい作品です。

「いしぶみ」を読んで

一の宮中一年 大塚 興

毎年夏休みになると広島で原爆被災者の慰霊と世界平和を祈念する式典をテレビで見ます。戦争について考える時期でもあります。僕は、戦争であつたいろいろな出来事を聞くたびに戦争というものはとつともなく恐ろしく、残酷なもので絶対に経験したくないものです。

八月六日原爆の日、NHKスペシャル「原爆死〜ヒロシマ七十二年目の真実〜」の放送を家族で見た時、お父さんが一冊の本を推めてくれました。「いしぶみ〜広島二中一年生全滅の記録〜」という本です。僕と同じ中学一年生なので興味を持ち、読書感想文の本にしました。

一人一人の原爆投下前後の記録が書かれており、その時の状況がよく分かり、僕も思っていた通り苦しく、悲しいものでした。また、一人一人の写真が写っており、まったく今の僕と同じ中学一年生です。僕は今、毎日の野球の練習が楽しいです。きっと、この広島二中の一年生のみんなも楽しいこと、やりたいこと、挑戦したいこと、いろいろな夢を

持っていたと思います。原爆は命だけでなく、何もかも全てをうばいました。

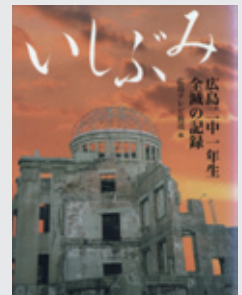
特に心に残った場面は、先生と数人の生徒がやけどを負い、川にとびこみ、川の中でお互いに声をかけ合ったり、君が代を歌ったり、最後まであきらめずに一生懸命生きようとしていた場面です。その中には、水にもぐったまま上がつてこなかった友達や流されたり、力つきて沈んでいく友達もいたそうです。ある生徒は先生と岸にはい上がり、飲み水を探しているうちにけががひどかった先生は、最後に「君はがんばれよ」と言葉を残し、その生徒の手をしっかりとりにぎって別れたそうです。目の前は地獄のような情景の中、どんなにお父さんやお母さんに会いたかったかと思うと、どうしても胸が絞めつけられるような気持ちになりました。また、手をにぎって別れた先生の生徒への強い思いにも心を打たれました。

戦争、原爆で命を落とし悲しかった人々の痛み、苦しみ、悲しみは想像を絶するものだと思います。改めて絶対に戦争はやってはいけないと、この本を読んで強く感じました。この本の題名である「いしぶみ」は、広島市公園にある広島二中の慰霊碑の一字「碑」をとったものです。その慰霊碑の裏には全滅した広島二中の生徒たちの名前が刻まれているそうです。「碑」という字を辞書でひくと、「事跡を後世に伝えるため、文字を刻んで立てておく石」と説明されています。つまり、大きな出来事ののちの時代に伝えたいために石に文字を刻んで残しておく、という意味があるのです。年々、被爆者が亡くなつていき、原爆を知り、語り継ぐ人々がいなくなつてつづつあるそうです。後世にどうやって伝えていくのか、一人一人が考えていくことが大切だと思います。

今、ニュースでは、北朝鮮の問題や憲法改正、テロ、人種差別など世界中でいろいろな問題が報じられています。戦争が始まるのではないかという意見も耳にします。

この本のメッセージである、戦争のない平和な世界がどんなに大切なものを僕は絶対に忘れず、また、この広島二中一年生に起こった悲劇を忘れません。

『いしぶみ〜広島二中一年生全滅の記録』
広島テレビ放送 編
(ポプラ社)



(審査講評)

やりたい夢をいっぱい持っていた自分と同じ中学一年生の広島二中一年生全員が戦争、原爆投下により想像を絶する痛み、苦しみ、悲しみの中で命を落とした実話に深く心を痛め、「戦争のない平和な世界がどんなに大切なものがあるか」を改めて強く感じたという思いが、慰霊碑「碑」のメッセージとともに強く伝わってきます。八月六日「原爆死〜ヒロシマ七十二年目の真実〜」というテレビを家族で観ていたときにお父さんからすすめられ読んだというのもしばらしい本との出会いですね。

五岳を望む聖地

あそ宮地墓地

募集区画 5㎡より各種 全区画平地

☆ご連絡くださいご案内・ご説明いたします。 販売・・・有限会社石翔

阿蘇市一の宮町宮地4699 一の宮総合運動公園通り

電話 (0967) 22-6099

お気軽にお問い合わせ下さい。

広告

「私と吹奏楽」

阿蘇中央高校一年 渡辺 滴

この本とは学校の図書室で出会った。表紙に大きくコンクールかなにかのステージで演奏する吹奏楽部が描かれていた。私は中学で吹奏楽をしていたので興味があり、読んでみようと思いで手に取った。

「普門館なんて、夢のまた夢」そんな弱小吹奏楽部に所属する主人公たちの前に謎の女性教師が赴任してくるのがこの物語の始まりだ。先生の厳しい指導に戸惑う主人公だったが、自分たちの成長を感じるにつれて、吹奏楽にかける思いは高まり、仲間との絆も深まっていく。そして夢の舞台・普門館への出場権に挑んでいく。

私は吹奏楽経験者というところもあり、何度も共感できるところが数多くあった。中でも、各楽器1st・2nd・3rdとあるのだが、1stを後輩が吹くことになる場面だ。1stは主のメロディー

を担当することが多く、特にトランペットの1stとなることも華やかだ。その1stの座を後輩にとられてしまうことは吹奏楽ではよくあることなのだが、それはとても悔しいと思う。しかし、「1stが偉くて、3rdはダメだ」とか思ってるの？高音部を吹くやつが偉くて低音部を奏でるやつがダメなんだったら、チューバやコンバスはどうなるんだよ。あいつらずっとダメな楽器をやってるわけ？」という林那津の言葉に、私も一時期、1stは楽器が上手な人は吹奏楽部で偉いと思いつ込んでいたことがあったが、それは間違いだったと考えさせられた。音楽は1st以外のパートの支えがあつてこそ、すばらしいものとなるのだ。また心に残った場面は、主人公がフルートのパートリーダーとしてもしっかりとパート内の音に気を配るよう、土屋副部長に注意される場面だ。この場面を読んだ時、私は吹奏楽だけにかぎらず、周りに気を配ることは大

事だなとあらためて思った。吹奏楽は周りの音を聞きながら演奏しないと全体がまとまらず、心がバラバラになる。他のスポーツも同じだし、学校生活でも同じだ。周囲のことに目を向けることで、困っていることや、悩んでいることに気づいて話を聞いたり、一人でいる子に声をかけたりなど、他の人の力になることができる。自分のことだけを考

えるのではなく、周りにも気を配り、自分に何ができるのかを考えるようにしていきたいと思つた。それが、私自身の成長につながり、周りへの感謝を伝えることになるのではないか。

私は、この本を読んで他にも、これまで体験してきた大事なことをとても懐かしく思い出すことができた。中学のころ勉強よりも吹奏楽にあけくれたこと。みんなの音がピタリあつた時のあの感動。部内の空気がピリピリしてくじけそうになつたこと。この本を読みながら三年間吹奏楽を一生懸命やっていたあ

頃の思い出が、一気に私の頭を駆けめぐつた。この本と出会つたおかげで、中学時代の部活動を通して学んだ大切なことを思い出すことができた。どんな思いで高校に進もうと考えたか、初心に返ろうと思つた。

友達と何度もぶつかり、上手いかないところを何度も練習したり、先生に反抗的な態度を取つたりした日々。あの当時は、吹奏楽で得たものは何も無いかもしれないと思つていたこともあつたが、実は自分の人生の中で、かけがえない瞬間だつた。みんなと一つの目標に向かつて一緒に頑張り、苦しみもがくなかで得た本当の楽しさ、周りに気を配る大事さなど、今までの自分が気づかなかつたものを全て教えてもらった。これから私は、将来に向かって、前に進んでゆく。壁にぶつかったら、今まで教えてもらつてきたことを思い出し、自分らしく恐れずに乗り越えていこうと思う。



『グライオーソ』
山口なお美 著
(星雲社)

(審査講評)

物語の主人公と自分の吹奏楽の体験が、抽象的でない具体的な描写の形となつてしっかりと重ねられ表現されています。それは、最初はバラバラな個々の楽器から奏でられる音と音が少しずつ一体感を増しながら一つの楽曲を完成させていく過程そのものです。演奏者の心理もきちんとこちらへ伝わってき、本に対して繊細で柔軟な「想像力」を働かせたことがよくわかります。表面的な喜怒哀楽だけではない人間の葛藤を通じた成長を見事な言葉のアンサンブルで感想文として仕上げてくれました。